

【70】住宅火災の死者

この頃の住宅火災では、小住宅1戸とかマンションの一室とかのそう大きい火事でもないのに、人が亡くなるケースが多いようです。

かつて減少しつつあった火災件数は、近代的な建築の住宅が増えてきているのに、近年増加傾向にあり、それに伴い火災による死者も増加してきています。

その主な理由は2つあります。一つは高齢者世帯（独居者を含め）の増加、一つは小規模な住宅火災でも有毒ガスや炭酸ガスが短時間に大量に発生し、居合わせた人々の行動を不自由にし終いには失神に到らしめ屋外に逃げ遅れることです。

現代の住宅（マンションを含め）の室内は、部屋の内装、家具、調度、日用品、寝具や衣類に到るまであらゆる分野にプラスチック系の化学合成品がゆきわたり、それらは高熱にさらされたり燃焼するとススと黒煙を伴った有毒ガスを発生します。

家具など一見すると木製品に見えるものでも純粋の木造りではなく、木屑や鋸屑を合成接着剤（悪く言えばノリ）で固めた木材もどきや薄い板を張り合わせた合板（いわゆるベニア板）が多用されており、純粋無垢の木を使用したものは非常に高価になります。

部屋の内装の壁紙、天井、床材にもプラスチックが用いられていることが多いのです。

バスタブ、洗面台、台所の調理台等一見ハウロウビキに見える純白で清潔そうな水回り製品は多くの場合、硬質プラスチックです。（刃物で表面に傷がつきます。）

一々例を挙げていくとイヤになりますが、私たちの居住空間は化学合成品で埋め尽くされているのです。それどころか着ているものも化学繊維のことも多く、着火したら大ヤケドを負いかねません。

石油の採れない日本が石油製品であるプラスチック漬けという不合理は脇において、火事が出たらプラスチックの発する有毒ガスにやられる前に、密閉されている居住空間から脱出することが肝心です。

火災防止の啓蒙書（※）にのっていたアメリカのフィラデルフィア市消防局の手になる一般向の火災のマニュアルを孫引きで紹介します。

火事を自分で消すなどか、消防署への連絡は一番最後とか日本人には少し抵抗感のある項目がありますが、あくまで人命第一主義の考えに貫かれています。

煙 感 知 器 が 貴 方 の 命 を 救 う

1. 感知器が鳴ったら、家から逃げるのに3分しかありません。
2. 火事の時、何をすべきかそして如何に速く逃げ出すか、家族とあらかじめ計画しておく。
3. 火事は夜間に発生することが多いので、照明を消して訓練しておけ。
4. 2つ以上の脱出ルートを考えておく。

5. 子供を訓練せよ。子供は驚くと隠れる習性がある。
 6. 火事を自分で消そうとするな。(Don't try to fight the fire yourself.)
 7. パニックにならず、出来る限り速やかに家から出る。
(Get out of the house as quickly as possible, without panic.)
 8. 家の外での家族の集合場所をあらかじめ決めておく。
 9. 家から脱出したら出来るだけ早く消防署に電話連絡する。
-

(※) 火災教訓が風化している！(1)、森本 宏 著、2001、近代消防社